

る訳ではありません)、貝の殻にあたる部分がいわゆる軟甲(ペラペラした軟らかく透明なもの)にあたります。また、アオリイカは沿岸からでも容易に釣れ、見た目がずんぐりしているのでコウイカの仲間と思われがちですが、コウイカは軟甲ではなく、石灰質の硬い甲があるのが特徴です。実はアオリイカはヤリイカやケンサキイカの仲間になります(図1、2)。

さて、そんなアオリイカですが、現在日本に生息するアオリイカは3種類。もともとは沖縄の漁師さんがリーフの内側にいる100g程度の小さなイカをクアイカ、リーフの外側にいるイカをシロイカ、船を使わなければ行けない深場に生息するイカをアカイカと呼んだのが始まりと言われています。ただし、この名称の使い分けもこれまでにほとんど知られることなく、また厳密に分類されることなく扱われてきたため、よほど詳しい釣り人でなければその違いに気が付かなかったと言



沖縄の居酒屋に飾ってあったコウイカの一つであるコブシメの甲。推定10kgほどのビッグサイズです。



和歌山県で釣り上げたカミナリイカ。大量のスミをまき散らします。重量は2kgほどで、甲に紋様があることから別名「紋甲(モンゴウイカ)」とも呼ばれます。

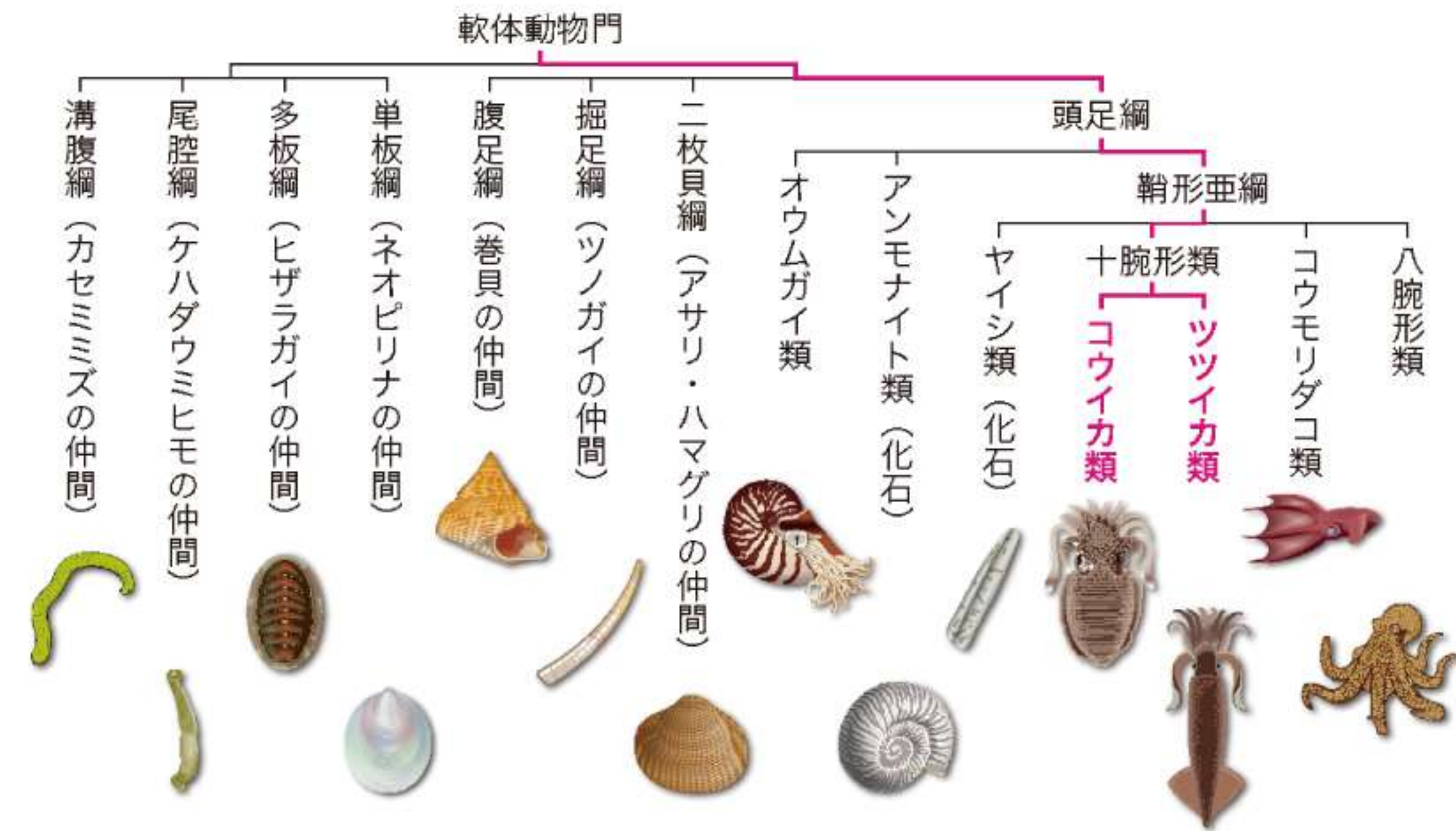


図1 イカ類の分類学上の位置
(出典：全国いか加工業協同組合HP「イカ学のススメ」をもとに作成)

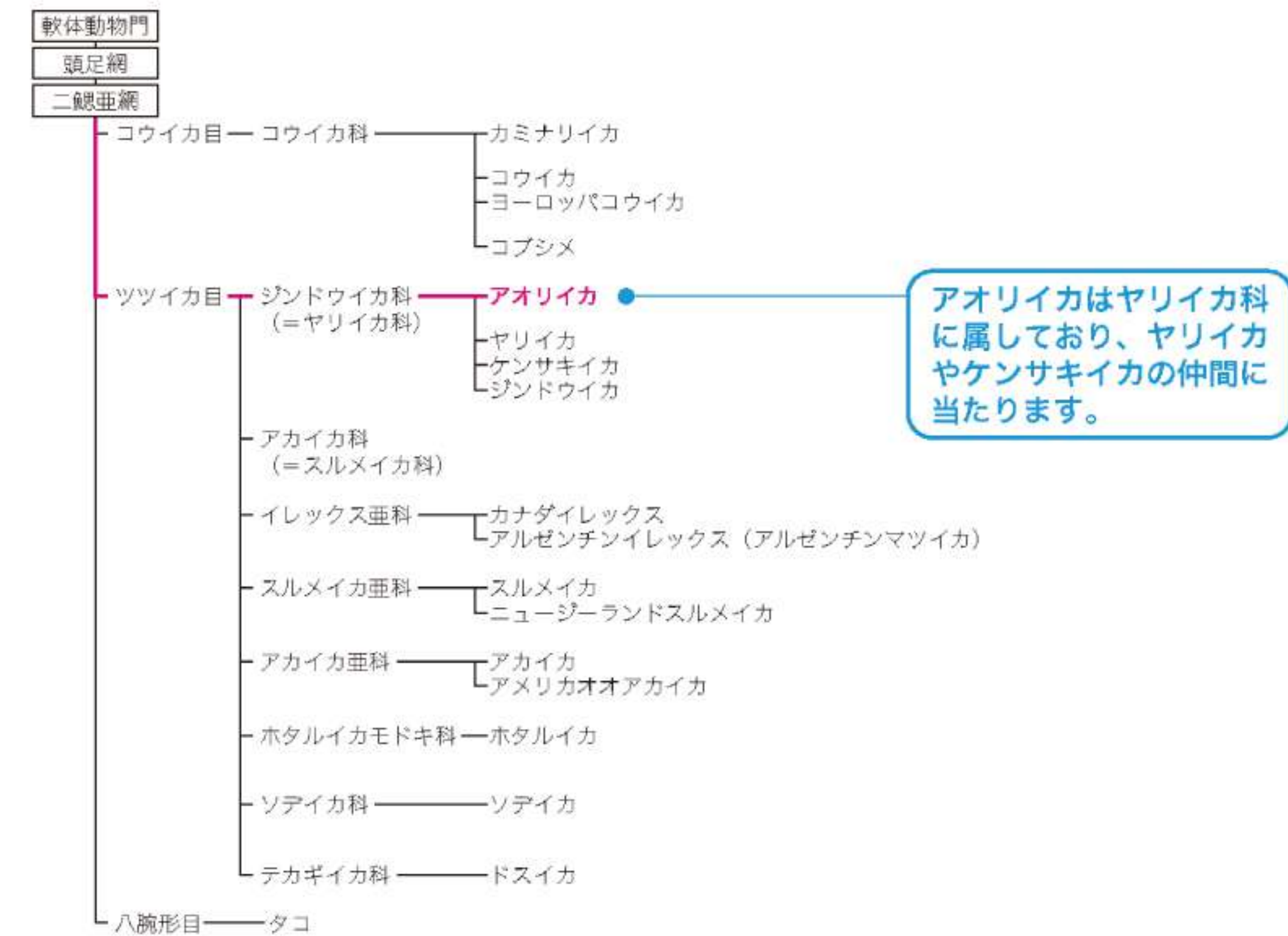


図2 イカの種類
(出典：全国いか加工業協同組合HP「イカ学のススメ」をもとに作成)



和歌山県日置川沖で2016年2月に釣り上げたアカイカ。水深は55m。この日は水深25～55mまで様々な水深に散らばっているのを釣り上げています。このように持つとゲソの太さが際立ちますね。この腕で捕まえられたら魚もひとたまりもありません。



和歌山で日中に釣り上げたアカイカ。水深は30m前後。胴が非常に長い割にエンペラが薄いのが特徴です。このため、写真を撮る時にこのように持つとエンペラが垂れてしまい長く見えてしまいます。



2016年3月深夜に屋久島のオカッパリで釣り上げた3.2kgと2.8kgのアカイカ。水深は5m前後。昼間、この水深でエギを投げてもアカイカが釣れることはまずありません。捕食のために接岸したところを狙い撃ちしました。



アカイカ型

最も大型化するアオリイカで、オスでは何と6kgを超えるサイズに成長します。漁師さんの話では7kg、8kgまで確認されているとか……。近年その生態が明らかになりつつあり、遊漁船、岸釣り（オカッパリ）問わず人気急上昇中のターゲットです。生息域に関しては未知の部分が多いのですが、沖縄、奄美大島、屋久島、種子島などの南西諸島その他和歌山が主な生息場所と考えられており、水深は20～100m以上と非常に深いのも特徴です（なんと、105mに設置した産卵床に卵があるのが確認されています！）。昼間は深場で生活していますが、夜になると岸から投げて届く浅場に現れエサを捕食するため、昼は船から、夜は岸から狙うのが一般的です。水温の高い地域（特に黒潮の中）に生



沖縄のアカイカ。名前の通り足も胴も真っ赤！ 釣り上げてから時間が経過してくるとこのように赤い色がはっきりと見えてきます。これはシロイカでは見られない発色です。

アカイカ型のアオリイカが最大で6kg超えとなることを考えると、恐るべき成長率と言えそうですが、そんな事で驚いてはいけません。実は可食性のイカの中で最大とも言えるソデイカは卵のサイズが約1mm程度であるにもかかわらず1年後には胴長で80cm、頭部分を入れた大きさが1m以上、20kgを超えるまでに成長するのです。イカの成長には脱帽です。

❖ 1年の行動パターン

アオリイカは産まれてから死ぬまでどんな行動パターンを示すのでしょうか(図2)。実はアオリイカには二つの異なる行動パターンがある事が分かっています。それは何か？一つは春と秋の季節的な違い。もう一つは日本海と太平洋の地域的な違いです。

春と秋の行動パターンの違い

〈春〉

無事冬を越すことができたアオリイカは、水温が上昇するにつれ産卵を意識するようになります。具体的には15℃前後を境にして産卵行動を開始するわけですが、この時のアオリイカは一生で最後の、そして命懸けの仕事である「産卵」にすべてを注ぎ込むため、行動の基本はすべて産卵絡みになります。このため水温の上下動や潮汐(満潮・干潮)に非

常に敏感です。すべての行動パターンはこの二つに集約されるといっても過言ではありません。もちろん秋のイカも水温や潮の干満によって動きは変わりますが、それは状況の良し悪しで食いが良くなる、悪くなるといった程度の話です。春のように根本的に産卵を意識しているときほど敏感とは言えません。これは秋のイカがエサを取ることにすべてを注いでいるため、多少の悪条件なら捕食に大きな影響を及ぼさないからであり、春のイカは捕食そのものは条件の良いときのみだけで、エサをしつこく追いかけることもありません。また、産卵場所に集まり出すと捕食は完全にストップし、産卵床の選定、確認などの準備に取り掛かります。アオリイカの産卵は1回で終わることはなくおおよそ1〜2か月の間に10

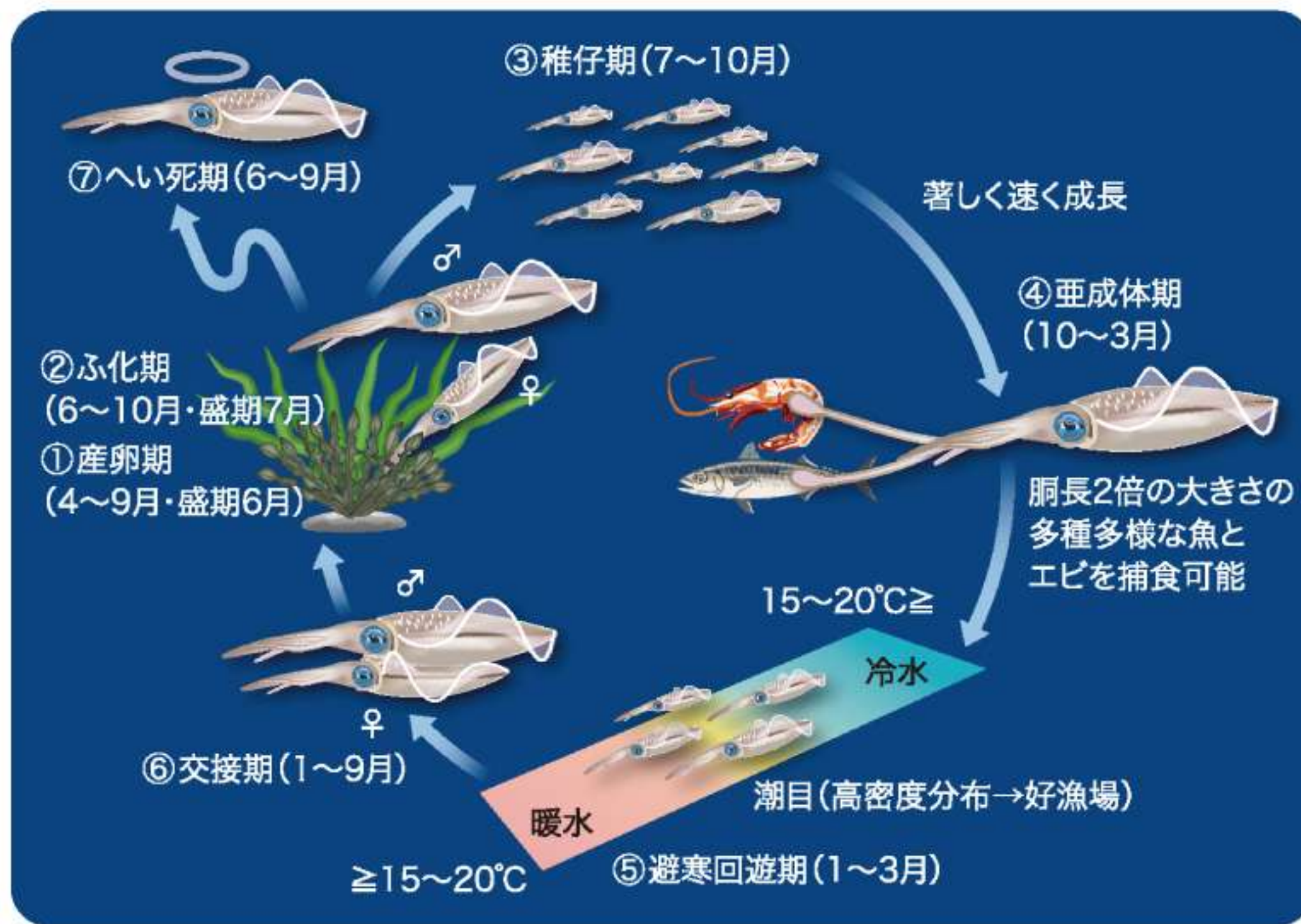


図2 アオリイカの一生

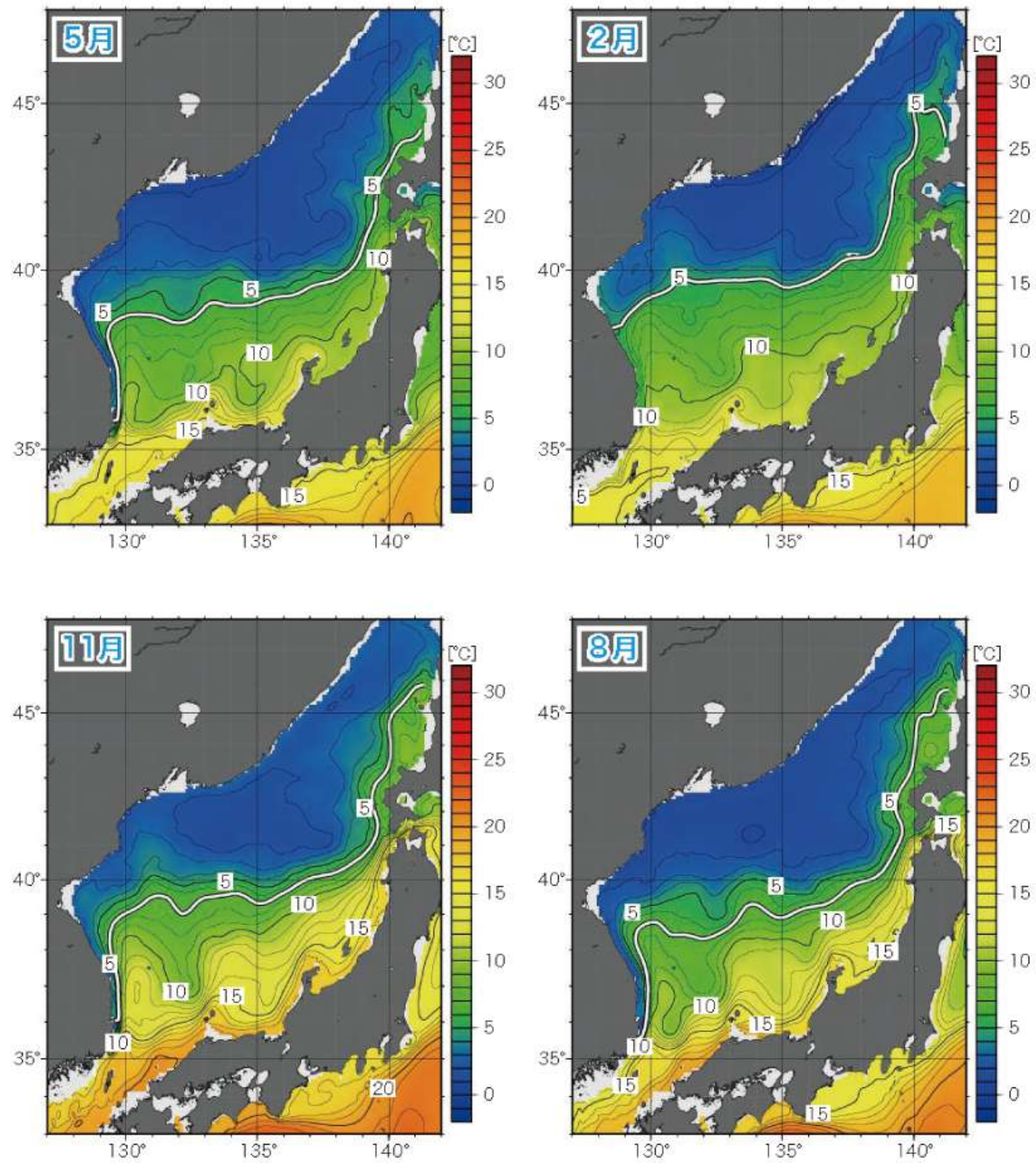


図4 対馬暖流の流れ。2→5→8→11月になるに従い日本海沿岸のオレンジが濃くなり、等温線が密になっていきます。この線の間隔が狭くなるに従い対馬暖流はスピードが速くなります。

(出典：気象庁 HP)

図4は対馬暖流の流れです。日本海沿岸にある黄色からオレンジ色の部分が対馬暖流を表していますが、2月から5月、8月に向かうに伴い、沿岸沿いの等温線（温度の等しい地点を結んだ線）のように見える線の間隔が狭くなっていきますよね？これが流速の上昇を示しています。よく、春から夏にかけて日本海で沖釣りをしていると、どうにもならないくらい潮が速くなってしまいう時があります。これは日本海で釣りをされた事がある方なら良くご存知だ

一方、産み付けられた卵は約3週間前後でふ化します。ふ化したアオリイカは穏やかな湾内や入江で育ちますが、台風や海が荒れたりすると外海へ放り出されます。そして、日本海の大きな流れである対馬暖流に乗り北上します（図3）。対馬暖流とはいわゆる黒潮の分流のことで、5月頃から水温の上昇に伴い流速が一気に加速します。実はこれが日本海のアオリイカにとって重要な役割を果たします。



図3 春、九州北部から日本海南岸に接岸したアオリイカは対馬暖流に乗り北上しながら産卵を繰り返します。そして、生まれたシンコはさらに強くなった対馬暖流に乗って一気に北海道までたどり着く。命を懸けた大移動だ。

に端を発します。最近ではアジをルアーで狙うアジング、メバルをルアーで狙うメバリングなど、日本由来の釣り用語が増えています。ちなみに海外でエギを売っているところであれば大抵はエンジンで通用します。釣り方などは今更説明するまでもないほどに情報があふれていますので省略するとして、今回はそのエギについて深く考察してみたいと思います。

エギの発祥

エギの発祥はなんと300年前！江戸時代に鹿児島県の南西諸島（奄美大島周辺）で生まれたとされています。夜、沖に出た漁師のタイマツの欠片が海に落ちた際、アオリイカがその黒焦げの欠片を抱きに來たのがエギの原点と言われているのはあまりにも有名な話ですね。日本における疑似餌（いわゆるルアー）の原点はまさにこのエギと言えるでしょう。

そしてこのエギの凄いところは300年前からアオリイカが釣られているのに形が変わらないこと。これは凄いことです。他の釣りなら、時代と共に道具が進化し、全く別のものがどんどん開発されていますが、アオリイカに関してはエギを使つて釣るといふ基本はなんら変わることがありません。とすれば、300年前にすでにこのエギの原型を考えた人はもの凄い発見をした人ということになりますね。その間、先人達は他の形のエギ、もしくはエギに変わる何かがあるのではないかと考えて來たと思われませんが未だにエギを超えるものは出てきていません。例えばルアーフィッシングの場合、こんな時はコレ、あんな時はアレなど、状況に応じて使うルアーをチェンジしていきますが、アオリイカの場合、こんな時もあんな時も全てエギ。朝から晩までエギ。サイズの大小、沈下速度の違いこそあれエギであることに何ら変わりはありません。これは凄いといか言いようがありませんよね。

ただし、詳しく見てみると少しずつ形状の変化はあったようです（図2）。エギが作られた当時は魚型と呼



図1 沖縄の釣具屋さんで発見した魚型のエギ。もちろん現役で使われているものです。サイズは4.5～5号くらいでカンナは太くて強いものが使われています。調べてみると、一番上のエギは白焼きで鹿児島県喜入町のエビ型、下の4本は鹿児島県喜界町のエビ型が原型であると予想されます。

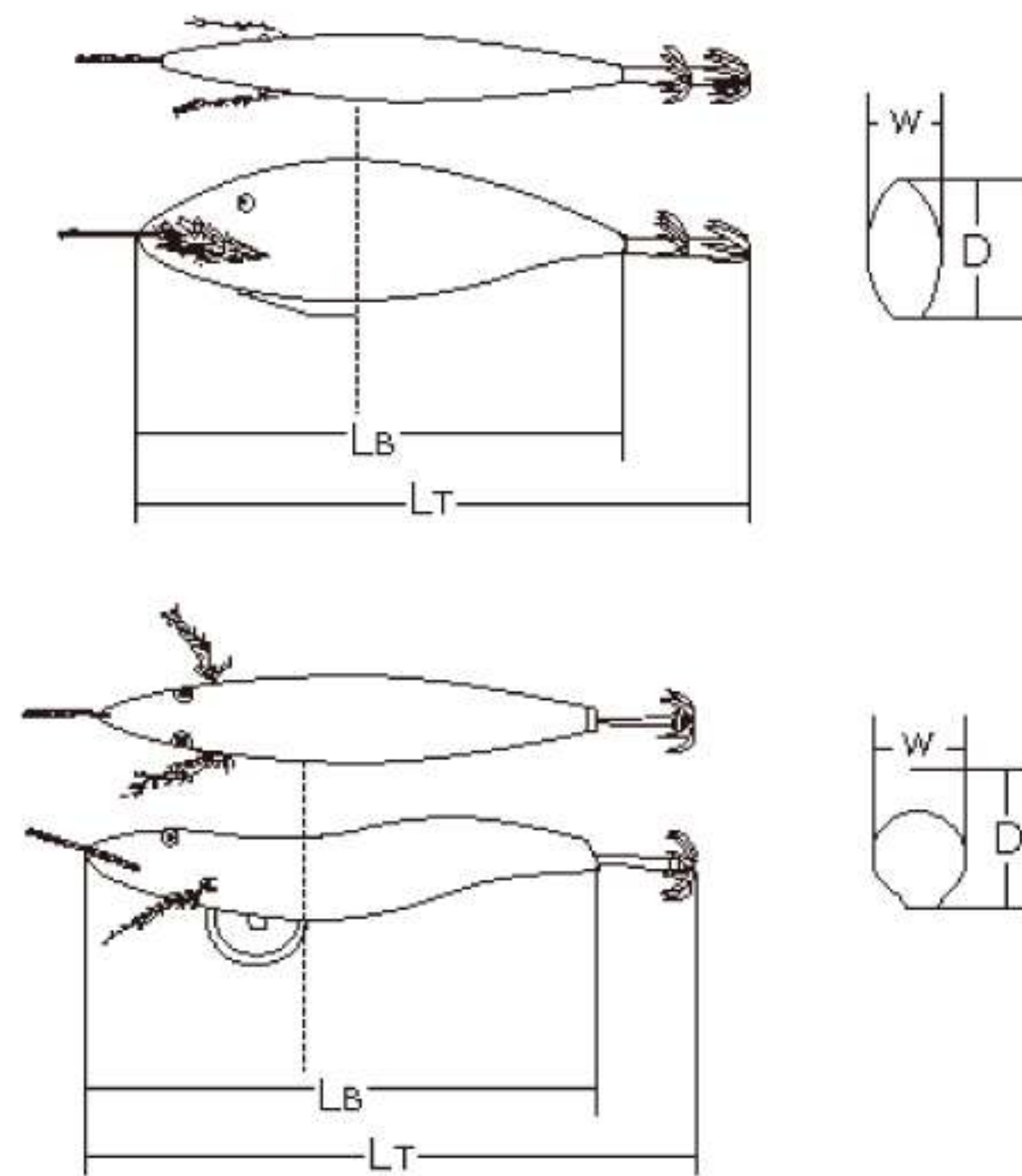


図2 上が魚型で下が細魚型。現代のエギは細魚型に分類される。なぜ？そしていつ？細魚型に変わったのか？

（出典：不破 茂ほか「アオリイカ擬餌針の形態について」『水産工学』日本水産工学会）